

「詩の青春」：朔太郎と犀星の交流 萩原朔太郎年譜考(一)

國生，雅子
九州大学研究生

<https://doi.org/10.15017/16269>

出版情報：文献探究. 7, pp.1-10, 1980-12-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

「詩の青春」——朔太郎と犀星の交流

萩原朔太郎年譜考(一)

国生雅子

昭和五十三年四月に刊行を終了した全十五巻の筑摩書房版全集によつて、私達はようやく全集という名に価する萩原朔太郎全集を手にすることが出来た。全ての初期習作群、日記・書簡等多くの貴重な資料が初めて収録されており、朔太郎の作品世界の全容を伝える全集として既に各方面からの高い評価を受けている。

ところで、その最終巻には伊藤信吉・佐藤房儀両氏による詳細な「萩原朔太郎年譜」が付されている。編纂者・編纂方法から見て、新潮社版全集第五巻付載伊藤信吉氏編年譜の誤りを正し、新たな調査結果を付け加えた貴重な年譜と言えるが、しかしこの労作にも問題点がないわけではない。たとえば、事実の誤認・記述の不統一・ケアレスミス等が年譜編纂という困難な作業の常としてかなり見受けられるし、又全集刊行後、従兄萩原栄次宛書簡が萩原隆氏の手によつて『若き日の萩原朔太郎』(筑摩書房昭54・6)としてまとめられ、多くの貴重な新資料が提供された結果、今日では年譜書き変えを余儀無くされている事項も枚挙に暇がない。

しかもこの年譜は定評ある全集に付載されたものだけに、読者に無批判に受け入れられてしまふ危険性が大きく、どのような些細な誤りでも放置しておくわけにはいかないように思える。研究者としての出発点という意味も込めて、ここに年譜研究を試みる次第であ

る。今回は大正三年時における朔太郎と犀星の交流とそれに関連した二、三の事項についての調査結果にとどめたが、この大正三年という年が朔太郎にとっていかに大きな意味を持つかについては、今さら説明する必要もないであろう。

尚、参照した年譜は筑摩書房版全集付載年譜(全集年譜と略記)の他、次の通りである。

・新潮社版『萩原朔太郎全集』第五巻(昭35・12)付載伊藤信吉氏編年譜(伊藤年譜と略記)

・『日本近代文学大系37萩原朔太郎集』(角川書店昭46・5)久保忠夫氏編年譜(久保年譜と略記)

・思潮社版『萩原朔太郎研究』(増補新版昭47・9)伊藤信吉氏編年譜

・三弥井書店版『萩原朔太郎研究』(昭48・5)河村政敏氏編略年譜(河村年譜と略記)

・佐藤房儀氏『詩人萩原朔太郎』(双文社出版昭52・11)年譜

又、本稿は久保忠夫氏「萩原朔太郎書簡覚え書——萩原朔太郎全集『書簡』を読む(つづき)」(『東北学院大学論集——一般教育』(昭52・9))から多くの貴重なヒントを得ており、氏の説に言及する場合特に注記のないものは同論文によるものである。

1 「詩の青春」

大正三年一月三十一日の日記に記された「ああどうかして呉れ、早くどれか来て助けて呉れ。」という朔太郎の叫びに応えるかのようには、滞京中の室生犀星が初めて前橋を訪れたのは同年二月中旬のことであつた。前年から手紙による交流が始まつていた両者の初対面の印象その他については幾つかのエッセイ、自伝類に詳しいが、犀星の自伝によれば三月上旬彼が帰京した後、後を追うようにして朔太郎も上京したとのである。「私の帰京後、秋から冬にかけて、萩原朔太郎は上京した。」（『泥雀の歌』「14 帰去来」史業之日本社昭17・5）、犀星が前橋を去つてから「一と月経ち二た月経つてから萩原は上京して来て、一緒に酒場歩きをしてゐるうちに」（『詩人萩原朔太郎』「新潮」昭29・6）、「大正三年二月前橋に初めて萩原朔太郎を訪ね」（『その年の初夏に萩原は上京して二人で上野あたりをぶらつき、毎晩酒を飲んで遊んだ。』（『私の履歴書』「日本経済新聞」昭36・11/13）（12/7）。「私の履歴書」にはこの少し後に、「当時詩を書く上にものんびりしてゐたのか、根権現の境内のベンチの上で、萩原と即興詩など紙切れに書いて、口からすぐの韻をふんだ詩を作つたりして詩の青春のやうな時を送つたものである。」と続いている。本稿における最大の問題は犀星が「詩の青春」と回顧した友情の蜜月時代の正確な時期を探ることにある。資料としては書簡、雑誌の消息記事の類を重要視したが、副次的なものとして両者の自伝、回顧的エッセイを用いざるを得ない。もちろん、犀星の自伝に甚だしい、時にはフィクションではないかとさえ思われる年代的錯誤には充分注意せねばならない。ただし彼の文章は一つの時代の雰囲気を生きたと伝えてゐる、それだけは確かなことのように思える。

全集年譜「生法事項」によれば、大正三年三月から七月にかけて朔太郎は計三回上京したことになっている。一回目が三月下旬から四月上旬にかけて、二回目が五月初旬、三回目が六月十日から七月にかけて。尚、この三回目の上京時、帰郷の際には「7月9日」に「午後六時から、室生犀星ら数人の詩歌人・画家らにより本郷区根権現内の『棋楽園』で朔太郎の帰橋送別の宴が催され」た由である。

一方、久保年譜・河村年譜では、四月上京七月帰郷となつており、久保氏は自説の主要な根拠が「詩歌」大正三年五月号と同八月号の「消息」にあることを明らかにしている。ちなみに「詩歌」「消息」から朔太郎・犀星関係の記事を抜き書きしておこう。（大正三年一〜九月）

- ・一月号 室生犀星君の詩集「愛魚詩篇」も近く出版せられる。
- ・二月号 室生犀星君は雑誌「女子文壇」の編集をすることになった。
- ・三月号 室生犀星君は急に女子文壇の編集を止めて旅に出た。今は前橋の宿屋で詩集「愛魚詩篇」の編集中。
- ・四月号 室生犀星君は刀根河畔から帰郷して本郷千駄木町四二、蔵田方に転居。

。五月号 萩原朔太郎氏は前月上京した。

。七月号 人魚詩社といふ詩社が、山村暮鳥、萩原朔太郎、室生犀星、三氏によって創立された、主として詩、宗教、音楽の研究を目的とする。

。八月号 萩原朔太郎君の帰国送別の宴が室生犀星君の發起で七月八日根津の一倶楽部に於て張られた、来会者、詩人歌人画家教十名。

室生犀星君は小石川白山前町五七妙清寺に転居した。

。九月号 室生犀星君は郷里金沢に前日凜然として帰った。消息の一端に曰く「せんちめんたる組の兇賊チケリスといふ別名をこしらへました。萩原は女探偵プロテア氏。」

(傍点は原文のまま)

伊藤年譜には「(7月)8日夜、室生犀星ら教人の詩歌人・画家らにより本郷区根津で帰橋送別の宴が催された」と八月号の記事が写されていることから、伊藤氏がこの「詩歌」「消息」を調査しているのはほぼ間違いないと思われる。ところで、全集年譜では送別の宴の日付が八日から九日に変わり、新たに「午後六時」「娛樂園」という詳しい時と場所が付け加えられているのだが、恐らく「詩歌」よりも信頼するに足る何らかの資料が発掘され、それに拠ったものと思われる。しかしそれが何であるのか、今の所調査がっていない。^{注①}

その問題は保留しておくとして、まず全集年譜三月下旬上京説の根拠を洗い出さねばならない。伊藤年譜には「3月 中旬上京。メ

エソン鴻の巢で開かれた『異端社』(尾山篤二郎主宰)第一回小集に出席し、山村暮鳥と戯詩を合作」とある。この異端社小集云々が大正三年十月上京時の出来事である事は、「侏儒」大正三年十一月号の「S倶楽部より」と題された消息記事によって判明する。これについては既に久保氏の指摘^{注②}もあり、第二刷(昭37・2)では「メエソン鴻の巢」以下が削除されている。全集年譜の三月下旬上京説は伊藤年譜三月中旬上京説を何らかの形で引き継いだものと思われる。ここで、伊藤氏が「詩歌」「消息」を調査している、と一応仮定しておく。すると五月号の「前月上京」の記事を見落すはずはあるまい。そこで、五月号の記事を四月中に書かれたものとみなし、「詩歌」五月号の発行は五月一日)、書かれた時点での「前月」つまり「三月」としたのではないか、という推測が成り立つ。しかし五月号における「前月」はあくまでも四月を指す。たとえば九月号の犀星帰郷の記事を見ていただきたい。「金沢より」(「異端」大3・9末尾に「八月十四日夜」と付記)によれば彼は「七日の夜行」で帰郷したというが、この「七日」が八月七日であることは説明する必要もないであろう。事実、八月二日にはまだ東京にいた事が北原白秋宛書簡によってうかがえる。^{注③}九月号の記事における「前月」が八月を指すならば、五月号における「前月」も四月を指すとみなすのが常識的な判断であろう。

以上より、「詩歌」「消息」を資料とする限りでは、四月(詳しくは中旬から下旬)^{注④}上京、七月帰郷説をとる久保・河村年譜がより事実に近いと言えるようである。もっとも伊藤年譜「三月中旬上京」

から全集年譜「三月下旬上京」への移行の経緯、及び七月九日娯楽園云々の記事の出所が明らかになる以上事実と断定する訳にはいかないのだが、全集年譜五月初旬再上京、六月十日再々上京の根拠はきわめてあやしいものである。以下、それらについて述べることにしよう。

五月初旬再上京説の根拠は「3日に室生犀星と共に、巡礼詩社友の歌人河野慎吾を訪ねる。」とある所から、書簡番号三二・大正三年五月四日付河野宛書簡かとも思われる。「局不明」「照合不能」と注記されたこの書簡は河野宅を訪問した後の犀星・朔太郎連名の礼状。前橋市立図書館蔵「萩原朔太郎全集編纂資料145萩原朔太郎書簡4（大正一）」に同書簡の資料は見当らず、正確な出所を確かめることは出来ないが、久保氏の指摘通り明治古典会「古書籍展覧大入札会目録」（昭44・12）及び「オール下見展覧大入札会目録」（昭48・7）中にその写真を発見することが出来た。「ほんじつはたいへん愉快でした」と記された四日付の書簡から、三日に河野宅を訪問したと断定して良いのか否か、はたしてこの書簡が五月初旬新たに上京したという証拠になり得るか否か、といった問題はひとまず置いておく。「詩歌」大正三年六月号に掲載された「緑蔭倶楽部」は習作集九巻の付記より制作年月日を（大正三年五月一日）と決定出来る。順序としてはこの作品の方を先に検討すべきであろう。

「都のみどりば腫にいたく」といった歌い出しから、「五月上旬のあさまだき／街樹の下に並びたる／わがともがらの一列は／はまたきたばこの魔酔より／襟脚きよき娘らをいだきしむ／みないっしん

にいだきしむ」と続く「緑蔭倶楽部」にうたわれた「ともがら」には明らかに犀星のイメージが投影されている。朔太郎「感傷詩論」（「詩歌」大3・12）の一節に「乞食をしても葉巻煙草を吸ふ者は室生犀星一人のみ。」とあり、犀星「金沢より」の東京時代の思い出を朔太郎に語りかけた部分には「女が通れば抱きつき、東京売店の雑種児様をして狼のごとき叫びを立たしめた」云々とある。「はまたきたばこの魔酔より／襟脚きよき娘らをいだきしむ」のくだりは「街に放たれた野の獣」（「室生犀星に与ふ」）犀星の像そのままではないか。彼が東京大正博覧会々場で売店の混血娘をいきなり押し倒そうとした、というのははよほど印象深い事件だったらしく、朔太郎は十余年後の昭和三年一月「新潮」に発表した「室生犀星に与ふ」でもそのエピソードに触れている。つまり、最も素直に解釈するならば、大正三年五月一日に作られた「緑蔭倶楽部」は犀星を中心とした仲間達（尾山篤二郎や広川松五郎）との東京における交遊をうたった作品、ということになる。五月一日朔太郎は既に東京にいた。しかもそこでこの仲間達との交遊をある程度経験しているらしい。とすれば四月から引き続き上京中とみなすのが穏当な見方であろう。少なくとも五月初旬新たに上京したという証拠は見当らない。

六月十日上京説の根拠は、三二・大正三年六月九日付（年月日推定）河野宛書簡に違いない。「明日上京／十一日の午前私に私のところへ来て下さい例の人魚詩社萩谷へ／さくらろう／九日」といった内容の書簡には「東都古書会の古書市目録からの転載のため、発信地、宛先など不明である。萩谷方とあるので、便宜的にここへ置い

た。」と注記されている。「便宜的にここへ置いた」理由は、次の三四・六月二十七日付津久井幸子宛書簡が本郷千駄木一ニ〇萩谷方から発信されているからであろう。この河野宛書簡も全集編集資料中に資料が収録されておらず「東都古書会の古書市目録」がいかなるものであるのか知る事は出来なかつたが、先の明治古典会「古書籍展覧大入札会目録」中に同内容書簡の写真を認め得た。久保氏はこの目録に掲載された全二十四通河野宛書簡について触れ、六月九日付と推定された書簡は、十月九日付であろうとの見解を示している。確かに、「萩谷方とあるので、便宜的にここへ置」くのならば、十月十四日付萩谷方発信白杖宛書簡の前でも何ら差し支えはない。むしろ十月九日付と推定する方が自然な推理・推論と言うべきだろう。朔太郎が大正三年十月十日上京した事は「侏儒」「地上巡礼」という二つの雑誌の記事が証明してくれているのであるから。年月日推定の書簡を年譜編纂の資料とした態度にも問題があると言わねばならないだろう。書簡が収録された全集第十三巻の編集・校訂も伊藤・佐藤の両氏であり、もし他の資料から六月十日上京が実証し得るのであつたら、書簡の注にもその旨記すべきであろう。

又、同書簡に見える「人魚詩社」であるが、朔太郎、犀星、暮鳥の三者が「人魚詩社」を結成したという記事は「詩歌」の他、「文章世界」「アララギ」七月号、「風景」八月号の消息類に見られる。実際に結成されたのは六月頃と決定して良いだろう。参照した全ての年譜が人魚詩社創設を大正三年六月のこととしている。そのうち「アララギ」七月号「編集所便」結社創設の記事の末尾に「通信は

本郷区千駄木町一ニ〇人魚詩社のこと」と記されているという事実には注目しておくべきである。

大正三年七月迄の書簡の中で本郷区千駄木一ニ〇萩谷方から発信されたものは六月二十七日付妹幸子宛の書簡のみ。朔太郎の回想に「前の世界大戦の時、私はまだ詩壇に出たばかりの無名詩人で同じ仲間の詩人室生犀星君と本郷あたりの下宿屋にござうしてゐた。^{注⑤}」とあるが、その「本郷あたりの下宿屋」が千駄木町一ニ〇萩谷方であろう。犀星「私の履歴書」には「萩原の下宿は私の所からは十分ぐらゐでいけた。」とあり、彼の下宿先「千駄木町四二蔵田方」から近距離にあつたと推定される。犀星の下宿ではなく、朔太郎の下宿が詩社の通信先とされた、ということは最も確実な連絡先であつたということだ。それは朔太郎が萩谷方にある程度長期間滞在しており、以後もそこに住みつく予定であつたことを意味している。つまり当時の朔太郎の生活の本拠地は東京であつた。よしんば先の年月日推定の河野宛書簡が本郷に六月九日付であつたとしても（とすると詩社の結成は六月九日以前ということになるが）詩社の通信先を長期間留守に出来るはずはなく、帰郷はきわめて短期間のものでしかなかつたと思われる。

全集年譜を読む限り、大正三年三―七月の朔太郎は東京・前橋間を頻りに往復していたという印象を受ける。しかしながら彼の帰郷について明らかにし得たのは七月九日送別の宴の記事のみで、五月初旬上京の際の在京期間も不問のままに終っている。五月初旬、六月十日の新たな上京が明白な事実として証明されない以上、大正三

年四月から七月を朔太郎の東京時代と断定して差し支えあるまい。肝要なのは、朔太郎の生活の概要を一つの明確なイメージとして捉えることだ。その点、全集年譜の精密なようであるが、これはひたひたまいな記述では、彼の生活像を把握するのは不可能に近いと思われ

る。では次に、その全集年譜の記述をたどりながら犀星と共に過ごした東京生活を細かに見て行くことにしよう。

三月下旬から四月上旬にかけての上京の際に「室生犀星と共に高村光太郎訪問。また犀星と上野公園で開催中の東京大正博覧会を連日のように見物」とある。光太郎訪問については、「僕がまだ無名作家で、室生と二人で東京にござる、ござるしてゐた頃、図々しくもよくこのアトリ工を訪ねたものだ。その頃先輩の高村氏は、僕等に親切にしてくれたので、一層思い出が強いのである。」^{注⑥}と云った朔太郎の回想が残されている。「室生と二人で東京にござる、ござるしてゐた頃」とは大正三年の春から夏にかけての時期以外に考えられない。しかし三月下旬から四月上旬にかけて訪問した、とは朔太郎の回想中どこにも書いてない。先輩詩歌人訪問については、犀星も「私と萩原朔太郎はつれ立って北原白秋、若山牧水、斎藤茂吉、前田夕暮、高村光太郎などを訪問して歩いた。」（『泥雀の歌』『帰去来』）と回顧している。全集年譜は他に白秋と牧水訪問について触れているが、前者に関しては朔太郎の書牘から事実を確認し得る。しかし後者については朔太郎・犀星の回想が残されているばかりであり、しかも朔太郎の回想文中には、「創作」^{注⑦}に作品を掲載してもらった

機縁から牧水と会うようになったのだが、その当時犀星とは手紙の往復をするだけであつたと記されている。大正二年時、朔太郎は既に一人で牧水を訪問していたと考えられるわけだが、これも又他の客観的資料の裏付けを欠いている。そこで全集年譜では大正二年と三年の頃の終りに牧水訪問の記事を入れるという慎重かつ適切な処置が取られているのだが、何故光太郎訪問については同じ配慮が払われなかつたのか――

東京大正博覧会は、大正三年三月二十日から同年七月三十一日迄上野公園と青山練兵場で開催されているので、三月下旬上京したとして、一応見物可能ではある。しかし博覧会見物はこの時期に限ったことではない。むしろ、「何と云つても僕たちの強い記憶は、あの千九百何年かの、上野博覧会の時の交遊だった。夏であつた。僕は毎日のやうに池の端の会場へ行き」（「室生犀星に与ふ」）云々とあるやうに朔太郎に強い印象を与えたのは夏の博覧会である。博覧会見物の記事を三月下旬から四月上旬に限定して挿入するのは明らかに不的確と言える。

五月の記事に「この頃、山村暮鳥主宰誌『風景』『プリズム』（水戸）、犀星の關係した『遍路』『鈴蘭』（金沢）、朔太郎の關係した『侏儒』『狐の巢』（前橋）などに集まつた三地点の詩人達はたがい交流があつた。」とある。「風景」の創刊は大正三年五月であるが、その他の雑誌はこの時点ではまだ出されていない。第一、朔太郎・犀星の生活の本拠地は東京である。このすぐ後に「人魚詩社」結成の記事が続いているので、多分暮鳥・朔太郎・犀星三者間

の交流を強調したかったのであろうとの意図は判るが、伊藤年譜のように大正三年の項の終りに「水」印を付して書き入れた方が適切である。

六月には「水」印を付して「根津権現内の木陰を、室生犀星と散歩しながら便箋に詩を書いたりした。」とある。先に引用した犀星「私の履歴書」によると思われるが、犀星の自伝でしか確認出来ない事項をそのまま年譜に書き入れて良いものか。時代の雰囲気を感じてエピソードなので、記事そのものはあっても良いと思われるが「書いたりしたらしい」とでもしておく方が妥当。この後に続けてフランス映画「プロテア」に夢中になり朔太郎と犀星がそれぞれ登場人物であるプロテアとチカリスの名を名のった事が記されているが（「詩歌」九月号「消息」参照）、月村麗子氏の調査^{注⑩}によって、二人が見た探偵映画は「プロテア」第二編と「丁組」（原題「ゴッパ」）の二本であり、チカリスは後者の登場人物であることが明らかにされている。

飲酒無頼、先輩詩歌人訪問、若い芸術家達との交流、博覧会、そして探偵映画。それらに彩られた東京生活、伝説的とも言える時代の雰囲気は両者のエッセイを引用しなからもう少し詳しく伝えたいのだが、紙数の関係上割愛せねばならない。ともかくも、博覧会に象徴される近代的なものへの憧憬の中で、朔太郎は初めて芸術家仲間へのヘミアン生活を知った。それは放蕩生活につきもののある種の苦々しさを裏面に潜ませていたとしても、強い色彩と刺激とに満ちた幸福な日々であったろう。田舎の投稿青年朔太郎が生の詩壇に

触れたのもこの時である。朔太郎二十九才、青春と呼ぶには少々遅まきながら、彼らの生活は詩的青春という意味での「詩の青春」ということばにふさわしいものである、と同時に、朔太郎の詩が『月に吠える』に向って開花する前の準備期間、文字通りの「詩」の青春でもあった。それは何も『月に吠える』集中最も発表の早い「殺人事件」（「地上巡礼」大3・9）が「プロテア」等にイメージを触発された作品であり、同じく「感傷の手」（「詩歌」大3・9）に「ああ、都をわすれ」といった東京生活の名残りを感じさせる一行が見られる、といった点のみを指すのではない。ここで特に強調したいのは、前者の意味における「詩の青春」の良きパートナー犀星が、後者の意味においても同じ役割をはたしたであろう事である。判りやすい例では、朔太郎「供養」（「創作」大3・7）前半部と、犀星「合掌 その五」（「詩歌」大3・6）『抒情小曲集』では「その六」の類似がある。さらには「感傷」を根幹とする詩論の展開や独特のリズム論にも犀星の影響が大きい。否、影響と言うよりもそれはまさしく三好達治が評したように二人の「協同作業」^{注⑪}であった。この時期、朔太郎は「愛憐詩篇」から『月に吠える』への過渡期を歩いていたわけだが、同じく犀星も過渡期にさしかかっていた。「愛魚詩篇」刊行の試みとその挫折^{注⑫}が何よりも雄弁に彼の混迷状態を語ってくれるであろう。「愛憐詩篇」と犀星詩の関連については最早語りつくされた感さもある。しかし大正三十四年期の作品についてはいくつかの暗示的な指摘のみに止まり、正面から問いただされることは少ない。転換期の混迷と共に生きた二人の「協同作業」に

ついてはいずれ別の機会に詳述したいと考えているが、ともかくも大正三年春から夏にかけての「詩の青春」が「協同作業」をより強く促したであろうことは間違いないし、それが他ならぬ東京という土地で練り広げられた青春の一コマであることは都会を憧憬した詩人朔太郎にとって大きな意味を持つと思われる。

2 二つの上京

「詩の青春」の舞台、東京に関連して――

先に少々触れたように、朔太郎は大正三年十月十日上京する。帰郷したのは「侏儒」十一月号「消息」によれば十月二十二日。ただし夕暮は「詩歌」十一月号の「編集後記」に朔太郎は二十一日に前橋に帰ったと記している。全集年譜の日付は「侏儒」に拠っている。上京中の最大の催しは異端社の小集であろうが、全集年譜には日付が明記していない。「侏儒」「S俱樂部より」によれば十七日との事。しかし夕暮は、暮鳥は十七日の夜帰ったと記し、異端社小集については何も触れていないので、この日付には少々疑問が残らないこともない。

犀星が金沢に去ったのも手伝つてか、この時から朔太郎は白秋に異常なほどの思慕を寄せるようになる。帰郷直後の十月二十四日付白秋宛書簡には「一日に二度も三度も御うかがひして御仕事の邪魔をした私の真実を考へて下さい」とある。

「東京遊行詩篇」も上京中の成果の一つ。「詩歌」大正四年一月号には「東京遊行詩篇——十月下旬滞京中作」の総題の下に「遠景」

(その一)と「狼」(その二)の二作が掲載されている。その他遺稿中の幾つかに「東京遊行詩篇」の付記が見える。

一方、大正四年二月、インフルエンザに倒れた朔太郎はその病が癒えた後、故郷を立出する。全集年譜には次のように記されている。「2月 下旬から三月一日にかけて上京。その間に白秋を訪ね、またこの間に小田原で何日かを過す。」この記事では不十分であり、何よりも彼の旅行の意図を正確に伝えていない。「若き日の萩原朔太郎」収録の大正四年三月二十七日付書簡によれば、旅行の正確なルートは小田原、伊東、大島、東京。もちろん小田原へ行く前に東京に立ち寄ったであろう。「暖い地方へ旅行し病後の保養をしよう」(大正四年二月二日付栄次宛書簡)というつもりであったが、結局は自ら「静かな田舎よりは賑やかな都会の方が恋しい」(同三月二十七日付書簡)人間である事を確認する旅に終った。

全集年譜はこの後に「*」印を付して、「一日のうちに二度三度と白秋を訪ねたらしいことが白秋宛の書簡に書かれている。」事、「白秋と二人で浅草へ出かけた際」「車屋に南洋人に間違われてエトランゼを気どり、法外な車賃をとられ」たり、白秋と「酔つて電柱の登りつこの真似をしたりした。」事、「当時の生活から」「東京遊行詩篇」と付記した作品が生れた。」事が記されている。しかし、朔太郎が白秋を一日のうち何度も訪ねたのは先の大正三年十月二十四日付書簡が明らかにするように大正三年十月上京時の出来事。「東京遊行詩篇」も大正三年十月の作。中ほどに綴られたエピソードは朔太郎「青年時代の文遊」が出典だが、「その後長い

間、白秋氏とは、親しい交情を續けて来た。或る時は二人土耳古帽を被って、浅草に行き、人力車夫から南洋人とまちがはれて「云々」とあるだけで、何年の何月頃のエピソードであるか明記してあるわけではない。つまり大正四年二月の頃の「*」印以外は明確に時期を決定出来ないエピソードをばさんで、後は全て大正三年十月上京時の事項なのである。余りにも大きなケアレスマスであり、わざわざ研究者の注意を喚起する必要もないかもしれない。しかし『現代詩読本——萩原朔太郎』（思潮社昭54・6）収録の年譜にはこのミスがそっくりそのまま写されている。誤りが流布しかけているわけであり、東京という都合が朔太郎にとって持つ意味の重大さを考えると、早急に訂正されることが初学者のためにも望ましい。

3 犀星の離橋 その他

犀星の前橋滞在期間は、彼の「祈禱——一九一四、三月利根川の畔にて——」（『詩歌』大3・4）の末尾に（自二月十四日至三月八日）とある所から、大正三年二月十四日から三月八日迄とされて来ている（伊藤年譜、久保年譜）。全集年譜でも「2月14日 東京から室生犀星はじめて来橋」となっている。しかし、犀星「前橋を去る H氏に送るこぼし」（『上毛新聞』大3・3・19）には、末尾に「——三月九日一明館にて——」と付記されており、彼の離橋はあるいは三月九日であったかもしれない。こゝろ辺の事情は既に野口武久氏が書かれており、伊藤氏も「浪漫的交遊の輪——萩原朔太郎と室生犀星の往来」（『本の手帖』昭42・9）では三月九日を離橋の日

としている。全集年譜は「3月7日 室生犀星離橋に当り、別離の宴を料亭に設け、若枝を呼ぶ。」と記すだけで、離橋の日付を明らかにしていない。犀星『泥雀の歌』に彼が前橋を去る時「萩原は私を料亭に招じて別宴をひらいてくれたが、お父さんのゆく料亭らしく萩原はかへりに黙ってそこを出たが、それは水いっけの手であらうと思うた。度上二三の枝の侍るもあつて」云々とあり、別離の宴は犀星の回想を根拠としたのかもしれない。しかし、七日という日付はどこから来たのだろうか？ 八日に離橋したのでその前夜であらうと推定したのか、あるいは明確な資料的裏付けがあるのか、不明。いずれにしても、犀星離橋の記事はもっと明快な書き様がありそうなのである。

全集年譜には、大正三年十二月「上京。十日間ほど滞在。」とある。この記事の根拠は未だに掴み得ていない。しかし十二月二十九日付栄次宛書簡には「十一月下旬からは私のために暗黒時代でした、病気がぶらぶらついたのですっかり憔悴してしまいました。」とあり、とても上京出来るような健康状態ではなかったと思われる。前橋に逼塞する朔太郎にとって上京は最大の関心事、楽しみであったはずだが、十二月中に出された木下謙二宛、白秋宛、栄次宛（二通）書簡のいずれにも上京の事は記されていない。十二月上京の信憑性はきわめて疑わしい。

その他、大正四年一月十四日付と推定されている二通の白秋宛書簡の日付についても疑問が残るが紙数もつきたので、こゝで一応ペンを置くことにする。漸次調査対象年代を拡大し、今回未調査のも

の、根拠の掴み得なかつた事項については、再調査の上次の機会に報告して行きたいと考えている。

注

①「アララギ」「風景」「文章世界」の大正三年八月号には送別の宴についての記事は見うけられない。

②「伊藤信吉氏編『萩原朔太郎年譜』を見て(1)」（「東北学院文芸」昭37・5）

③木俣修「犀星と白秋(1)——室生犀星の白秋に宛てた書牘及びその注」（「学苑」昭40・1）

④久保氏は「都にわれのかしまだつ」という一行が含まれる「花鳥」（「創作」大3・6）の初出の末尾に「——一九一四、四、一五」と付記されている事から、朔太郎の上京を四月十五日からやう、くない日と推定している。ただし習作集九巻「花鳥」の末尾の付記は（一九一四、四、二〇）となっている。どちらが正しい制作年月日なのか判断は出来ないが、大正三年四月の中旬から下旬にかけてのある日、朔太郎は上京したのである。尚、嶋岡晨氏は朔太郎の上京を三月末か四月初めと見ている（『伝記萩原朔太郎上——〈欲情〉の時代』春秋社昭55・9）。三月二十四日『上毛新聞』に「滞郷哀語篇」と付記された二作を発表した後、四月中旬頃迄の朔太郎の生活を明らかにする資料は発見出来なかつた。全集年譜三月下旬上京説の根拠はもう一度洗い直す必要がある。

⑤「前欧州大戦の頃」（「信濃毎日新聞」昭15・6）『阿帯』（河出書房昭15・10）収録

⑥「歳末に近き或る冬の日の日記」（「新潮」昭3・4）傍点は原文のまま。

⑦「詩壇に出た頃」（「日本詩」昭9・10）『廊下と室房』（第一書房昭11・5）収録

⑧「プロテアとチクリス」（「群像」昭54・10）

⑨岩波文庫版『萩原朔太郎詩集』（昭27・1）「あとがき」

⑩「詩歌」大正三年一月号、三月号「消息」参照。同誌大正三年十一月号「消息」に「愛魚詩篇」抹殺が告げられており、十一月号掲載犀星「下足制」にはその事情が記されている。

⑪「青年時代の交友 下」（「都新聞」昭16・1・26）

⑫「詩のふるさと前橋」（前橋市観光協会昭52・10）

朔太郎作品、犀星作品の引用はそれぞれ筑摩書房版全集、新潮社版全集に典拠し、原文の正字体を略字体に改めた。ただし犀星「金沢より」は初出誌に拠る。

——九州大学研究生——